



2013年(平成25年)

5月号(No. 816)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

第1回 小島烏水祭を開催	
～全国からの参列者を迎え生誕地・高松にて～	1
「山の日」制定に向けて 超党派議員連盟が発足	4
日本山岳会東海支部 東海学生山岳連盟主催	
クスムカングル南東壁登山隊2013	5
東西南北	7
支部交歓のエベレスト街道	
地形図の原点である相模野基線	
支部だより	8
北海道支部／北九州支部／	
東九州支部	
活動報告	11
科学委員会／資料映像委員会	
新入会員	11
図書紹介	13
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	18
INFORMATION	18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.2	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

第1回 小島烏水祭を開催

～全国からの参列者を迎え生誕地・高松にて

四国支部長 尾野益大

小島烏水祭が、このたび生誕地である香川県高松市で開催された。全国から参列者が集まり盛大に行なわれた様子を、主催者である四国支部から報告してもらった。

日本山岳会創設の発起人で初代会長に就いた小島烏水(1873～1948年)が、四国・香川県高松市の高松藩士の家に生まれて今年で140年。この節目の年の4月13、14両日、生誕の地で「第1回小島烏水祭」が、四国支部によって開催された。

記念式典と除幕式

日本山岳会本部から寄託された銅製レリーフを埋め込んで、建立

した顕彰碑の前で記念式典を行なうとともに、記念講演会、前夜祭を開き、来賓、会員、関係者ら約110人を集めて「山の巨人」烏水の功績をたたえ遺徳をしのんだ。14日の記念式典は、晴天となった。香川県庵治産の庵治石で造られた顕彰碑(高さ1・71m、幅1・92m)が立つ峰山公園の一角で、神事と碑前祭に分けて開催。除幕式を含む神事は、峰山公園を抱えた石清尾山の麓に鎮座する石



記念式典にて、参加者一同

清尾八幡宮の磯部宗直神職を祭主に迎え、出席者が見守るなか、鎌田守恭香川県議員、岸本泰三高松市副市長(市長代理)、中村順一高松市議会議員、尾上昇日本山岳会会長、神崎忠男日本山岳協会会長、近藤信行氏、三木信夫氏、重

廣恒夫日本山岳会関西支部長、小島誠氏(小島烏水二男豊氏の長男)、南英敏氏(同五女雪枝氏の長男)ら来賓と尾野が出席して、厳粛に挙行された。

注目が集まった除幕式では、来賓が引くひもで顕彰碑から白い布が下ろされると、公園一帯に響き渡るほどの拍手がわき起こり、「おーっ」という歓声が聞かれた。神事を見守る会員は、しきりにカメラのシャッターを押していた。

記念式典の碑前祭では、日本山岳会四国支部の坂本眞生顧問(永年会員)が開式の辞を述べ、主催者代表の尾野が「転々とした小島烏水のレリーフがようやく古里の山に落ち着いた。レリーフの顔は安堵の表情を浮かべているように見える。登山愛好家だけではなく

多くの人に烏水の功績を知ってもらいたい」と挨拶した。

昨年4月の四国支部総会で烏水祭実現の必要性、重要性を説き、開催を熱心の後押ししてくださった尾上日本山岳会会長、神崎日山協会会長ら来賓が、烏水の偉大さを強調するとともに、開催に携わった関係者の労をねぎらう趣旨のお祝いの心情を言葉に表わされた。

献花もあり、本部を代表して高原三平常務理事と、この日出席した15支部(越後、富山、石川、東京多摩、千葉、静岡、信濃、山梨、東海、京都・滋賀、関西、広島、北九州、四国)の代表者が、顕彰碑の前にしつらえられた祭壇に一人ずつ菊一輪を手持って捧げた。

祝電では「祖父の業績が広く啓発されますことは親族の一人として大変喜ばしい。今後機会があれば家族とともに峰山公園を訪れレリーフの烏水にお目にかかりたい」(江面孝子氏)小島烏水長男隼太郎氏の長女、「レリーフの落ち着き先が決まって、しかも顕彰碑として立派に建立され安堵しております」(砂田定夫会員)との2つのメッセージが読み上げられた。続いて烏水の御孫様で、心洲流



序幕式参列の皆さん

吟詠会で活躍されている小島誠氏が碑の前に立ち、碑文に記された「山を讀する文」(烏水著)「昨日の我は今日の我にあらず 今日の我はおそらく明日の我にあざらむ」としてこれ向上の我なり…」の一節を吟じた。耳を澄ましていた出席者は、大いに感銘を受けた。烏水祭を祝う歌としてソプラノ歌手・国見仁美氏とピアノ・栗田美佐氏による「雪山讃歌」、烏水が好きだった富士山を詩に表わした「富士の山」も披露され、慣れ親しんだ山の歌に笑顔で一緒に口ずさむ出席者の姿が目立った。

四国支部の山平靖監事の閉式宣言のあと、出席者は代わる代わる

顕彰碑をカメラに収め、碑前で記念撮影をした。

高松城にて記念講演会

引き続き国史跡・高松城へ移動し、高松藩主の御殿「披雲閣」内で昼食をとった。

その後は記念講演会に耳を傾けた。大佛次郎賞を受賞した「小島烏水」の大著を持ち、顕彰碑の撰文で多大な貢献をしてくださった日本山岳会元理事で文芸評論家の近藤信行氏が、「小島烏水と日本山岳会」というテーマで話をした。

続いて、天皇家の大嘗祭にかかわる阿波忌部氏の直系・重文民家28代当主の三木信夫氏が「阿波忌部氏と大嘗祭」と題して話された。

お二人の話は、ほかではあまり聞くことができない貴重な内容だけあって出席者を魅了していた。

16時、四国支部の白石裕顧問(永年会員)の烏水祭の総括と出席者に対する御礼の言葉で、一連の行事はとどこおりなく終わった。

石清尾山の前夜祭としめくりに 剣山登山

これに先立つ13日は、観光と前夜祭があった。出席者は、国指定

特別名勝のなかでは最大の広さを持つ高松藩の回遊式大庭園「栗林公園」を見学して、バスの車窓から烏水が生まれた旧番町の街並みを眺めた。

18時半からは、夕食・懇親会が盛大に行なわれた。烏水の顔写真パネルを置いた舞台で、地元香川在住で四国支部の山崎隆史顧問が「四国霊場を巡るお遍路を迎える春に合わせて烏水祭を開いた」と開会宣言。尾野が主催者を代表して「感無量です。会場に着席されたどなた一人が欠けていても今回の烏水祭はできなかった。皆さんのおかげでこの日を迎えられた」と述べたあと、顕彰碑の建立場所選定について多大なご尽力を賜った鎌田県議会議員、市有地への顕彰碑建立を快く許可してくださった大西秀人高松市長らから心のもったスピーチをいただいた。

続いて吉永英明副会長の発声で乾杯。これに合わせホテル側の演出によって窓のカーテンが開かれ、高松の街並みの光が織りなす夜景が烏水祭を祝うかのように眼下に展開した。

全国各地の支部から届けられた祝い酒が順番に紹介されると、会



記念講演で話される近藤さん

場は一気に和やかな雰囲気包まれ、出席者は互いに旧交を温めたり初対面の挨拶を交わした。

烏水の御子孫として小島誠、南英敏両氏の紹介もあり、「烏水を顕彰していただくことに感謝申し上げます。本当にうれしい」と喜びを口にされた。祝電は、烏水旧蔵の美術作品や関連資料1300点以上を収蔵する横浜美術館の首席学芸員で「小島烏水 西洋版画コレクション」の著書がある沼田英子氏と山岳雑誌「岳人」編集部の熊倉逸男氏、遠藤靖彦山梨支部長から、時間とともに烏水の活動が風化してゆくのではないかと心配していた。小島烏水祭でその業績を

顕彰することはとても意義深い」などと伝えられた。

宴を盛り上げたのは、国見仁美氏と栗田美佐氏が「早春賦」「夏の思い出」「山小舎の灯火」「フニクリフニクラ」「エーデルワイス」など全11曲が歌われたときだ。会場に歌声が響くと、室内はムード満点、熱気に満たされた。

ドレスアップした関西支部の阪下幸一・悦子夫妻のダンスのあと、徳島の伝統行事「阿波踊り」だった。有名連「水玉連」に所属する法被姿の男性、あでやかな着物姿の女性、子どもたちが鉦、太鼓、笛の鳴り物に合わせて会場に踊り込んできた。出席者も「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにやそんな」の掛け声とともに一列の輪になり、二拍子のリズムに乗って見よう見まねで会場を一周りした。宴たけなわのうち、清岡謙一副支部長の万歳でお開きとなったが、有志は貸し切りの二次会会場で酒宴、カラオケともに盛り上がり、余韻はすぐには冷めなかった。

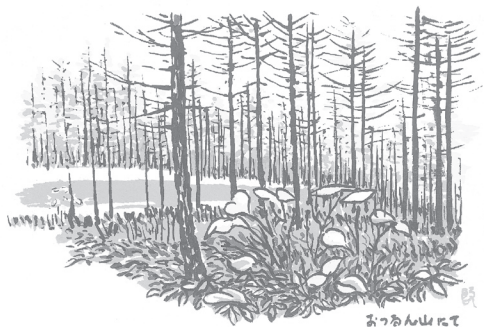
最終日となる15日には、希望者20人が四国支部会員4人の先導で四国第2の高峰・剣山（1955㎡）に登った。手つかずのブナやミ



地元名物・阿波踊りで会場が沸く

ズナラの林を堪能するとともに、晴天の幸運に恵まれたため360度の眺望にも出会え、参加者から「来てよかった」との感想が聞かれた。誰一人としてけがもなく下山して、JR高松駅に予定より早く到着することができた。

四国支部は、小島烏水祭に合わせ、烏水のイラストを元にして作った記念バッジや高知特産の幻の黒茶「碁石茶」、松山が全国に誇る銘菓「薄墨羊羹」、四国各地の多くの市町村に協力を求めて収集した山岳関係等のパンフレット類を出席者全員に記念品として手渡し、多くの人からおおむね好評を得ま



した。なお、全国の会員、一般登山愛好家・団体、企業等から賛同を得て寄せられた寄附者芳名録を掲載した記念誌（A4判、16ページ）も発行して配付しました。記念誌につきましても、寄附者全員に郵送などでお届けする予定です。

この欄をお借りしまして、小島烏水祭にご出席いただいた方にも、寄附金をいただきました皆様に感謝申し上げます。今後また一度、小島烏水祭を開催する予定です。ご出席、ご指導をお願い申し上げます。

Topic

「山の日」制定に向けて 超党派議員連盟 が発足

理事 萩原浩司

4月10日午前8時より、衆議院第1議員会館第3会議室において超党派「山の日」制定議員連盟総会が開催された。

当日、配られた資料の規約(案)第2条には「本会は、山の日を制定し祝日とすることを目的とする」とある。国民の祝日としての「山の日」を制定するには祝日法を改正する必要がある、その意味でも党派を超えた国会議員たちによる連盟の発足は「山の日」制定に向けて大きな一歩になったといえるだろう。

議員連盟の呼びかけ人は、谷垣禎一(自民)、衛藤征士郎(自民)、安住淳(民主)、藤井孝男(維新)、漆原良夫(公明)、柿沢未途(みんな)、穀田恵二(共産)、鈴木克昌(生活)の7党8議員(いずれも衆院)。初の会合となった今回の総会には、26名の議員と12名の議員代理が出席した。

総会は、呼びかけ人を代表して日本山岳協会の顧問を務める衛藤

議員の「みんなで『山の日』を作ろう、超党派で力を合わせよう」という挨拶で始まった。続いて日本山岳ガイド協会会長でもある谷垣議員が、自然豊かで美しい山の国・日本に、いま「山の日」を作ることの重要性について強調。

その後の会長選出では、谷垣議員の推挙を受け、衛藤征士郎議員が全員一致で選出された。会長に選出された衛藤氏は、「『山の日』を制定し祝日とする、という会の目的を実現するために、みんなの力を結集したい」と、あらためて会長としての意気込みを語った。

その後、会場にいる議員ひとりひとりが自分と山とのかかわりを述べ、登山者の安全対策、自然保護、観光資源としての山、地域活性化などについて簡潔に語った。

国会議員以外では官庁関係から環境省、文部科学省、内閣府、林野庁、観光庁の担当幹部が出席。それぞれ立場から「山の日」とのかわりについて所見を述べられた。

また、関係団体として「山の日制定協議会」から日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会の担当者が出席し、これまでの制定協議会の取り組みと、今後の運動の進め方などについて説明した。

この日の会議では役員の選出は衛藤会長に一任するということになり、最後に丸川珠代議員が「議連への参加者を100人まで拡大したい」と抱負を述べ、全員で唱歌「ふるさと」を歌って閉会となった。続いて4月18日に役員会が開かれ、初代役員が発表された。

最高顧問に谷垣禎一、顧問に井上義久、茂木敏充、会長に衛藤征士郎、副会長に安住淳、漆原良夫、柿沢未途、穀田恵二、小坂憲次、鈴木克昌、羽田雄一郎、鳩山邦夫、藤井孝男、吉田博美、幹事長に丸川珠代、事務局長に務台俊介の各議員が就任。役員会としての話し合いのなかでは、今後、自治体や官公庁、財界、学会など、幅広い分野への呼びかけと、なによりも広く国民の理解を得るための具体的な運営方法について意見の交換がなされた。「百名山にあやかって100人の参加者を」との目標に

ついては、4月末日現在、参加者の数は64名である。

昨年10月の「山の日」ネットワーク東京会議以降、地方における「山の日」運動への取り組みが盛んになりつつある。今回の超党派「山の日」制定議員連盟の発足は、こうした動きをさらに加速させてくれるに違いない。



レポート

日本山岳会東海支部 東海学生山岳連盟主催
クスムカングル南東壁登山隊2013

東海学生山岳連盟 山田利行

今回の主テーマは、学生メンバーで、アルパイン・スタイルでクスムカングル南東壁を完登・登頂し、同時に登山隊を一緒に作り上げた仲間が掲げるそれぞれの目標であるアイランド・ピーク全員登頂とエヴェレスト街道のトレッキングも成功させることだ。登山隊は、東海、関東の大学山岳部員11名からなり、クスムカングルへはそのうちの4名(内1名はBCまで)、アイランド・ピークは7名が挑戦することになった。主催した「東海学生山岳連盟」は、やる気のある学生は誰でも応援するという、その「親分」である高橋玲司さんに総隊長をお願いし、また多くの諸先輩方の支えによって、学生の大登山隊が誕生したのであった。

クスムカングルへ向けて

日本人11名とネパール人14名で歩いたエヴェレスト街道は、本当に「楽しい」の一言で、全員で踏破することができ嬉しかった。のん

クスムカングル南東壁へ

ゴンディジュン手前から目標の南東壁を望むと、写真で見たそのままでの姿がそこにあった。連日の安定した天候のおかげか、壁は安定しているように見えた。

当初は、タグナクという村からクスムカングルの東壁へ向かってアプローチする予定であった。しかしガイドのパスンにその話をすると、7年前にタグナク湖が決壊

して道が変わってしまった、タグナクからは道がないという。

12日、パスンが言うことに半信半疑の私たちは、彼が勧めるゴンディジュンからのルートを4700mの雪線手前まで、彼の案内で偵察に向かった。ゴンディジュンから急な丘を南東壁に向けて登る。4700mからは広い雪原になっていて、南東壁までのルートが見渡せる。こちらからのルートなら南東壁の末端から取り付くことができるし、予定していたルートよりも自然でいいなと思った。

衛星電話で現地の天気予報を聞くと、16日から悪天の予報だという。今回のルートは氷雪壁で、雪崩が安定していないと、どこでも雪崩が起きる可能性が高い。そこで急遽13日の朝、BC設営と同時にアタックすることに決めた。

しかし自分たちのヒマラヤという広大な山に対する目測の甘さと、BCから2日間で登頂するという無謀な計画だったため、壁の基部まで行くのが精一杯であった。さらに壁の基部から1000mは絶壁で、今の自分たちでは登れる状態ではなかった。本来予定していたルートはこのブランク・セクションの

上からトラバースして南東壁に入るもので、まさか壁の基部が登れないとは想像もしていなかった。

全員が落胆を隠せず、すべての荷物をBCに持ち帰り、1回目のアタックは完敗に終わった。

第2次アタックで南東壁完登

15日、第1次アタックの疲れが相当残っていたが、まだ壁へのモチベーションは失せていない。なんとか残りの日数で登りたい。そんな気持ちで予定を組み直す。当初の予定どおり16日に5000m付近にC1、17日に5600m付近にC2、18日にアタック、19日にBCまで帰還という予定を組んだ。

18日は、高所順応もうまくいき、天候にも恵まれ、3人とも体調は悪くない。「さあ、行くぞ!!」みんなもそんな気持ちだったと思う。5時すぎに出発。

南東壁の登り出しは、東壁側の岩壁基部の雪壁をトラバース。ロープを出すか迷う傾斜だが、雪崩が起きそうな感じなので、ロープを着ける。1か所、岩の出た部分があり慎重に越える。そこを越えたところで傾斜や雪壁にも慣れてきたし、時間短縮のためロープを

しまう。100メートルほど左へトラバースをして、尾根状の雪壁を快適なダブル・アックスで直上する。行く手を岩に阻まれ、少し迷って左から巻く。セラック帯に入り、リッジを登る。このあたりからガス

が南東壁を包み込む。ルートの判別が難しく、セラックや雪崩などの不確定要素が恐ろしく感じる。リードしていた大堀もそれを感じたのだろう。これ以上登るかどうか聞いてきた。時間も登頂想定時間のお昼ごろで、近くに見えた稜線のコルへ続くルンゼへも行動ス

していく。壁により先の状態が見えないし、ガスの切れ間から進むべきルートを見定めて進むという精神的に疲れる行動がずっと続く。ルンゼまで60メートルで4P。

迷ったときは、3人で話し合う。これは自分のなかで決めていたルールだ。十分なビーク装備があり、これまでの経験から稜線でビークしても大丈夫だろうと思っ

午後6時前、ようやくルンゼに入る。最終ピッチは稜線まで少しロープが足りず、スタカットからコンテに変えて登り、午後7時、ついに南東壁を完登した。稜線に着くと、すぐにビーク地を探し始める。全員思った以上に疲れており、ビークした方が安全だと判断した。明日の朝、頂上へ行けることも嬉しい。コルのすぐ左手にシュルントの横穴が開いており、見つけた途端に一目散に入り込む。入口と奥の方にクレバスが空いて

くつもの襷状氷雪壁をトラバース

19日。3時間くらいは眠れたか。

3人ともびったりくっついていたため、ときおり隣が身震いしているのが伝わる。仲間がいてくれてよかったと思う瞬間だ。体が冷え切っているのに、日が出る6時くらいに起き出す。外へ出ると快晴。全身に太陽を浴びて力がみなぎる。

東峰へのナイフリッジが素晴らしい。ビーク地から反対側の主峰はすぐ目の前で、主峰への登りも比較的楽そうに見えたので、ロープ1本とスノーバー2本、スクリユー4本を持って主峰へ向かった。

主峰まではクレバスもなく、ただの雪原を100メートルほど歩く。取付から主峰は垂直距離にして100メートルなさそうだが、傾斜は遠くで見るとかなり強い。ひとつクレバスを越えて取り付く。雪の状態がかなり悪く、スノーバーをラニンングに取るが、効いてはいないだろう。30メートル登り、セラックでできた頂上稜線に出る。セラックはシャーベット状の水の塊で、スクリユーも効かない。悩んだ末、引き返すことに決めた。頂上まで40メートルを残して。

しかし頂上に行けなかった失望感は一瞬で消え、すぐに頭は下降のことについていっばいになる。トレ

スを忠実に下降する。トラバースが多いので、できるだけクライム・ダウンした。懸垂下降は5回、アンカーはスノーバー、ハーケン、スノーボラード、アバコフとその状況に合わせてなるべく残置しないように努めた。飲まず食わずで下降し続け、16時C2に到着。C2で作り置きしておいた水をガブ飲みして、BCまで歩き通した。22時、BC到着。鎌倉が紅茶を用意してくれ、パサンが焚き火をしてくれた。2人に感謝しつつ、今回の登山が無事に終わったことに安堵した。

N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

支部交歓のエベレスト街道

大塚榮壽

クンデ・ピークから望むエベレストは、左肩にわずかに雪煙をまとい、クインプ山群の神々の座が無風快晴のなかに光っている。

3月末、首都圏・東京多摩支部・岐阜支部会員合わせて14人が、一緒にエベレスト街道を歩いた。きっかけは、2011年の年次晩餐会翌日の箱根・神山、駒ヶ岳への山行だった。そこで、東京多摩支部の古市進さんと岐阜支部の藤田純江さんが意気投合、ユニークな混成チームができた。

ネパール・ヒマラヤは初めてという人が約半数。東と西から7人ずつが参加した。平均年齢は東の77歳に対し、西の69歳である。若くはない。ピスターリ(ゆつくり)で行こうや。ルクラからシャンボ

チエまで4日間をかけた。トレッキングの仕上げがクンデ・ピークだった。4200mの山頂で、絹のカタにそれぞれが署名し、標識に巻いて山の安全とみんなの長寿を祈った。我々の後ろには、クンピラ山が指呼の間にある。村は、この山を「聖なる山」と崇めて、登ることを禁じているという。

山麓のクンデ村では、ジャガイモの植え付けに大忙しだった。男手が鍬で小さな穴を掘る。そこへ女の人が種イモをぽんぽん放り投げていく。ときどき穴から外れ、女性に苦笑い。イモを半分に切り、切り口に木灰をすりつけて畝に埋める。我が国の農家がやるような、手のこんだ作業はやらない。単純にして明快なのである。

シャンボチエの丘に建つホテル・エベレスト・ビューは、ひととき霧の中だった。夕方、タムセルクアアマダプラムが霧の衣を脱



ネパール・ヒマラヤのクンデ・ピークで(2013年3月24日)

ぐと、一瞬、夕焼けが山々の上半身を茜色に染めた。

ホテルに、さようならの夜。ほかのホテルと違って、従業員は男性のみ。彼ら十数人が、「レサム・フィリリ」と踊りを披露してくれた。私たちも手拍子で応じた。お返しに、「きょうの日はさようなら」や、「月の砂漠」を歌う。

岐阜市のNさんは、荷物の中にフルートをしのばせてきた。「エベレストを望む場所でフルートを吹きたい」。彼女の願いはかなって、合唱の伴奏の音は、3880mの夜の闇に吸いこまれてゆく。窓から見るタムセルクの上に、まんまるい月が出ていた。

地形図の原点である相模野基線

祖父川精治

東日本大震災で日本の地図作りの原点である相模野基線について、昨年度調査した神奈川県測量設計業協会などが、ずれ幅の推定値を東に12〜13センチと公表した。

また全長5・2キロある基線を再調査した結果は、1995年時より4・9センチ縮まったといわれる。国土地理院では、短くなった理由には、大震災以前の地震や地殻変動の影響も含まれると話している。周辺地域や山の標高についても、多少の変化があったものと考えられる。

基線は、三角測量の際、最も基準となる三角形の一边である。相模野基線は、1882(明治15)年に、広大な原野で平坦な見通しの良い相模野が選ばれ、陸軍参謀本部が地形図を作成するときに定めたものである。後に参謀本部測量局を分離し陸地測量部が新設された。

同年9月9日実測へ着手、現在の相模原市南区麻溝台と座間市ひばりが丘の一等三角点を結ぶ直線

平成25年度(前期)「海外登山基金助成登山計画」募集

海外登山基金審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。第27回となる今回も、困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。会員資格やパーティ編成などの条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成25年8月～平成26年1月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込締切 平成25年6月30日
- 審査と助成期間 平成25年7月中に審査し、理事会で決定、助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出を必ずお願いします。JAC会報『山』に掲載します。
- 問合せ・申込み先
日本山岳会事務局 電話 03(3261)4433

で、精算の結果、5209米969697としている。測量技術とその精度において、我が国の近代測定の原点になったものといわれる。それ以前には、北海道開拓使の「勇払」や内務省地理寮による「那須野基線」の測量が行なわれている。のちに基線中間付近には、文部省測地学試験所も設置されていた。やがて全国の5万分の1の地図すべてが、1925(大正14)年に初めて完成した。

相模野基線北端点、標高97・0m、点名は下溝村(相模原市南区麻溝台10-4)。旧名は、神奈川県高座郡下溝村ハの芝野。小田急相模大野駅から北里大学病院行バス、麻溝台中学校下車1分、さとう整

形外科医院の裏、小公園風に整備されている。建設省国土地理院の案内板、相模原市の指定史跡の標識、土木学会選奨土木遺産のプレートが並んでいる。

相模野基線南端点、標高74・9m、点名は座間村(座間市ひばりが丘1-29)。旧名は、神奈川県高座郡座間入谷村。小田急南林間駅から日産方向へバス通りを徒歩15分、鳥羽内科医院の庭先にあり、道路から確認できる。建設省国土地理院で設置された標識がある。文面には「この長さの変化を綿密な線り返し測量で見つけて地震予知等に利用している大切な測量基準点です」と記されている。地形図は2万5千分の1「座間、原町田」。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

山スキー同好会立ち上げ経緯と活動状況

北海道の冬山初登頂の多くは、山スキーにより達成された歴史があり、スキーは登山のための道具であった。

当支部でも、冬山登山には山スキーでの登頂が多く、登るのが目的で利用されていて、滑走を主目的に楽しむ会員は少数であった。

近年、バックカントリーの人気とともに、ゲレンデスキーから山スキーへの転向者が深雪を滑る魅力に触れ、滑走を楽しみたいという会員の希望が多くなっていた。そして、平成23年11月、同好会発足ミーティングが、参加者17名で行なわれた。

同好会立ち上げについては、山スキーのベテランである植田惇慈副支部長(兼企画委員長兼雪崩講

習委員長)にご指導・ご協力をいただき、植田会員と私が世話役となった。また岡田秀二、常本良一面会員にも下見などのお手伝いをいただいた。同好会参加条件は、支部主催の雪崩講習受講済みであること、山行時には三種の神器(ビーコン、プロローブ、シャベル)を携行することとした。

同好会メンバーは当初20名であったが、現在は35名となり、山行参加者も常時20名前後と多く、活発になってきている。

平成23年度活動は、23年11月・中山峠14名、24年1月・手稲山スキー場ネイチャーゾーン21名、手稲ネオパラ山16名、2月・春香山11名、日勝ピーク・沙流岳15名、4月・暑寒別岳18名。平成24年度は、25年2月・チセヌプリ13名、杜満射岳・タケノコ山20名、熊見山17名。4月に黒岳、6月に北鎮岳を予定している。



同好会メンバーによる熊見山滑降

平成20年度から、NPO法人北海道雪崩研究会主催の講師養成コース（4年間）に4名が参加して、支部独自の講師が誕生した。当支部主催の雪崩講習会も芳村宗雄、植田惇慈、増子麗子、樋口みな子、植田拓史、鈴木貞信各会員講師6名が中心となり、20年度から札幌地区では毎年実施し、帯広・北網地区、函館地区での講習会を含めると実参加者は56名となった。

この実施により、会員の雪崩知識・技能が高まり、夏山しか参加していなかった会員・会友が、山スキーで冬山に登り、滑走も楽しむことができるようになったのが良かったと思う。

参加者の感想として、「北海道支部に山スキー同好会がなかったのが不思議」とか、「深雪パウダーの滑走の楽しみを覚えてしまった」「深雪で転んだ人を助けたり、助けられたり、雪と戯れるのがとても楽しい」「リーダーが急斜面で滑走前の雪崩アクティブテストを実施し、安全確認したのが良かった」「今まで支部活動に参加していなかったが、山スキー同好会を機に参加するようになった」など。

新年度からは、支部夏山定例山行とともに、同好会活動から冬山定例山行に移行し、通年山行ができるようになる予定で、これに伴い、支部活動がさらに活発になることを期待している。（鈴木貞信）

北九州支部 名残雪のなか、英彦山で 清掃登山

福岡県添田町の英彦山（1200m）で4月7日、日本山岳会北九州支部などの登山愛好家およそ50人が清掃登山を行なった。

参加者は、3コースに分かれて登頂。強い寒気が流れ込んだ影響で、中腹から山頂にかけて5センチ程



清掃登山に参加した登山愛好者

度の雪が積もるなか、5時間あまりかけてゴミ袋24個分を回収した英彦山で4月に入ってから積雪は珍しく、2009年以来4年ぶりという。

下山後、回収したゴミを仕分けすると、燃えないゴミがほとんどで、一升瓶が10本、その他ビール瓶、ジュース瓶、徳利など50本、空き缶が100個ほどあった。

10年以上前から清掃登山を続けている伊藤支部長は、「山頂の展望台屋下は、昨年と同じようにゴミがどんどん出てきました。この場所は昔から、観光客が空き缶や瓶を投げ捨てやすい場所、まだまだたくさんゴミがあります。」

来年も支部をあげてゴミを回収したい」と張り切っていた。

また、登山者に対して、「山のトイレを考える福岡協議会」のパンフレットと「山のトイレマナー袋」、および「山の日」制定協議会のパンフレットを配布し、「英彦山の山頂付近にトイレを。山の日をつくる」などの呼びかけを行なった。

この行事は、西日本新聞と毎日新聞で報道紹介された。

（竹本正幸）

東九州支部 大船山のミヤマキリシマ 保護活動

3月3日、九重連山の太船山で行なわれたNPO法人久住高原みちくさ案内人倶楽部主催の、「守ろうミヤマキリシマ」ボランティア活動に、我が支部も参加した。この活動は、九重連山のミヤマキリシマがノリウツギなどの木々の繁茂に侵されて、年々枯死・衰退している現状のなかで、大分県自然環境企画課が大船山山頂付近のミヤマキリシマの復元を図ろうという試みで、環境省および文化庁の許可を得て、当団体に委託して実

施したものである。

午前8時、竹田市役所久住支所前にて出発式が行なわれた。ボランティアの呼びかけで集まったのは登山愛好家など38名、そのうち支部会員は10名である。車に分乗して山腹の伽藍台まで上がり、そこから大船山頂を目指す。ゆっくりペースで2時間半の登りだ。山頂直下の台地に着き、作業開始。

指示されたのは、環境省から許可された山頂の南側約100メートルの登山道の両側10メートル以内という作業範囲と、ミヤマキリシマとドウダンツツジだけ残してほかの樹木を除去し、それをさらに細かく切り、根元に敷くという作業だ。しかし、いざ作業にかかると、冬枯れた木々のどれがミヤマキリシマかドウダンツツジか、ノリウツギやヤシヤブシやリョウブの雑木なのか見分けがつかない人が多い。地元の人に懇切丁寧な教えを受けながらの作業となった。

支部会員も鋸や鉋を手にし、作業にかかる。登山道のすぐ脇は密生したブッシュである。それらをかき分け、1本ずつ樹木を見分けながらの作業である。熱心な作業で汗ばむほどとなり、冷たい風が

心地良い。休憩を入れて、約2時間半で予定の作業はほぼ終了となった。あとは全員揃って伽藍台までの下山だ。途中にある旧竹田藩主中川入山公の墓に立ち寄り、大船山をこよなく愛し、山に登った昔の殿様の逸話などを聞く。

昭和30年代後半までの大船山山頂からその西側斜面は、6月初めのころ、その広大な斜面全体がピンクに染まるほどミヤマキリシマが群生していた。昭和9年12月4日、この地域が国立公園(現在の阿蘇くじゅう国立公園)に指定され、ミヤマキリシマ群生地が特別保護区に指定された。また、36年9月21日には、文化財保護法による天



作業を終えて、大船山頂をバックに

然記念物にも指定されている。

しかし、近年ノリウツギやヤシヤブシ、リョウブなどが繁茂し、それらの植物の日陰になってミヤマキリシマがどんどん枯死・衰退しているのが現状である。この現状を嘆く声はかなり前からあったがこの地域は特に自然保護法による特別保護地区のため、原則的には木の枝1本切るにも環境大臣の許可を必要とする、厳重に保護された場所である。そのため、たとえばミヤマキリシマの枯死につながっている雑木と思われても、勝手な除伐は許されない。

そしてこのたび、県自然環境企画課は大船山山頂付近のミヤマキリシマを絶滅危惧種と位置づけて、その保護を行なうための雑木の除伐、かつ、試験的な行為として、山頂南側直下の限られた地域が特別許可された。昔のミヤマキリシマを懐かしむ者として、なんとか昔日のような大船山のミヤマキリシマのピンクの色合いを取り戻したい、と願うものである。

なお、この作業は来年以降も続け、雑木除伐の影響がどのように現れるのか、見守ることになっている。

(飯田勝之)

平成25年度通常総会のお知らせ

- ・日時 平成25年6月15日(土) 14時より
- ・会場 四谷駅前「主婦会館プラザエフ」

昨年からの新定款により、総会成立には、2分の1以上の出席者数(委任状を含む)が必要です(旧定款では3分の1以上でした)。

5月下旬に案内状等を配布いたしますので、同封ハガキに出欠席・委任をお書きの上、必ず返信ください。ご協力をお願いします。

(理事会)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

科学委員会

「氷河現存を確認」が大好評

科学委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする科学V」が3月23日、品川区の立正大学大崎キャンパスで開催された。会場となった大教室は、公募の一般参加者や山岳会員など約200人の聴衆でほぼ満員。4時間にわたる3テーマの講演に熱心に聞き入った。フォーラム後のアンケートでも、88%が「大変良かった」「良かった」と回答、「期待外れ」はゼロで予想を超える大好評だった。

最初は、東京農大の中村幸人教授の「日本の高山植生は東アジアの避難場所」。氷河期を通して千島列島、アリューシャン列島を経て北海道、本州へと下ってきたが、ひと口に高山植生といっても、地形や地質、気候など環境条件で4タイプに分けられるという。隔離さ



大好評だったフォーラムで講演に聞き入る聴衆

れて1万5千年、特に白馬岳、北岳で多様な高山植物が見られると締めくくった。続いて、立山カルデラ砂防博物館の福井幸太郎学芸員が登壇。日本で初めて現存する「氷河」と認められた剣岳三ノ窓雪渓、小窓雪渓、立山・御前沢雪渓を踏査し、クレバスに下りて氷を確認、1カ月に30分の「流れ」を特殊カメラに収めるまでのユーモア

たっぷりの現場体験に皆、感心していた。アンケートでも93%が「興味深い」と回答した。

最後に、茨城県自然博物館動物研究室の山崎晃司主席学芸員が、ツキノワグマの「本当の生態と人との軋轢の現状」と題して講演。ほとんども知られていないツキノワグマの生態を、貴重な画像や映像をふんだんに使って説明。近年の大量出沒の背景には、奥山のエサ不足、里山の消失など複合要因があるという。実際に遭遇しても人身事故の確率は低いとし、大声を出して逃げるなどをせず、落ち着いて行動するように、とアドバイスをしていった。(米倉久邦)

資料映像委員会

「グリーンランド探検・日本大学グリーンランド登山隊1966年」DVD寄贈受入れ

尾上会長より、16ミ記録フィルムをデジタル変換したDVD(25分)が寄贈されました。当委員会の所蔵映像資料に登録し、保管・管理します。

管理No.350(2013年4月)

(荒井真二)



『梅棹忠夫——「知の探検家」の思想と生涯』

山本紀夫・著



2012年11月
中央公論新社刊
中公新書 234号
定価 861円

本書は2010年7月に亡くなった、日本山岳会名誉会員・梅棹忠夫の思想と生涯を書いたもので、類書の中でも出色の内容である。著者山本は1964年、京大農学部入学と同時に探検部に入部。その関係で梅棹を知り、梅棹が館長を務める国立民族学博物館（民博）の教官として40年以上梅棹に接した。直接多くの影響を受けただけに、全編に流れる梅棹の未知へのあくなき探究心、それに向かって進む実行力、旺盛な好奇心など、この著者でないと書けないよ

うな内容は迫力があり、読む人を惹き付ける。

梅棹が本会名誉会員になったとき、いままでいろいろな賞を受けてきたが、本会のこの賞が一番嬉しい、と挨拶されたが、梅棹は自身、基本的に登山家であると自負していた。確かに学生時代からの彼の山歴、マナスル計画への関与などを見て、登山家として恥づかしくない実績を残している。後に彼は探検家として活動するが、その原点には登山があることは明らかであり、山への熱い思いは終生持ち続けていた。

本書は梅棹の登山、探検、そして知の巨人といわれた文化活動と思想を、第1章昆虫少年から探検家へ、第2章モンゴルの草原にて、第3章ふたたびフィールドへ、第4章東南アジアからアフリカへ、第5章アジテーター、第6章研究経営者、終章未知の領域に挑んで、

という構成で、各章梅棹の言葉を引用しながら、時代を追って説明している。

その内容は豊富で、たとえば時代の先を見通す力はどうのようにして養われるか、またいかにして民博を第一級の研究機関にしたか、フィールド調査で現地語をいかに覚えたかなど、梅棹の経験と柔軟な思考によるさまざまな貴重な教訓の多くを示しており、一読に値する。

梅棹はアジテーターとして多くの若者に影響を与えた。山岳部や探検部の若者は彼の影響で人生を変えた者も少なくない。人の偉大さはその与えた影響の大きさによるが、本書を読むと、梅棹の偉大さがつくづく分かる好著である。

(平井一正)

『静山巡歴』

松崎中正・著



2013年1月
白山書房刊
四六判 263頁
定価 1785円

タイトルでも分かるように、静

かな山を求めている紀行集である。中扉の裏に記載された「山、静ナルヲモッテ貴シ」という言葉からも、著者の強い意志が伺われる。それは、日本近代登山史の上でも、多くの登山家が求めてきたものであり、河田植著『静かなる山の旅』（1927年）、川崎精雄ほか著『静かなる山』正統2巻（1978〜80年）などのタイトルを持つ山岳書がある。あるいは田部重治、木暮理太郎、辻村伊助などばかりではなく、多くの人が山へ行くようになってからも、藤島敏男、望月達夫などは明確に静かな山を求

めて山行を重ねた。もつとも、近代登山は未踏の山を登ることから出発したのだから、当然の成り行きであろう。日本山岳会の歴史をたどつても、静かな山を求めて活躍した様子が見られる。

けれども、現在のように、登山道が整備され、多くの人々が山を訪れるようになると、著者が「あとがき」で述べるように「山は静かでない無傷の自然に浸ろう」とすることが至難の業である。

たとえば、この本の中の紀行「はるかなる平ヶ岳」を読んでも、筆者が1950年代に訪れたところと比べると、著者が訪れたころは自然はかなり荒れてしまっている。筆者は水長沢を遡行したのだが、二俣に達するまでは、籠の渡しで何度も利根川の支流を渡ったのである。もちろん、ほかの登山者には全く会わなかったほど、静かであった。

それにしても、著者は凝り性で、本のカバーの『静山巡歴』の字体を中国の有名な書家・王羲之、太宗、欧陽通、顔真卿など、4人の字体を一字ずつ引用している。凝ったのは、そればかりではな

い。4つの章のタイトルは「山笑ふの章」、「山滴るの章」、「山装ふの章」、「山眠るの章」としているのである。見ても分かるように、旧かなづかいにしている。かなづかいを別にしても、タイトル名は独特である。「あとがき」によれば、歳時記の山の季語によって分けたとあるが、ほかの山岳書にはほとんど見られない章分けである。

さらに、各章内の紀行文の並べ順が独特である。年代順でもなく、季節順でもなく、地域別でもない。これに関しては、著者もなから記していないので、どういう順序なのか筆者には分からない。また、珍しいのは、各紀行文には、すべて副タイトルが付いていることである。これも凝り性の著者の気持ちの反映であろう。

紀行そのものは1960年代のものも少し含まれているが、ここに集められた紀行文のほとんどが21世紀になってからで、紀行そのものも、1990年代以降がほとんどである。したがって、著者は「静かな山」を求めるのに苦労したことであろう。

「あとがき」にあるとおり、「なくもがなの人工が穢れを知らなかつ

た山奥にまで進み、携帯電話や舗装道路にしても山も街と区別なし」の時代に静かな山を求めるのは、前述したように至難の業である。

著者は写真が得意で、前著の『わが山路』や『山おちこち』にも多くの写真が挿入されていて、楽しい本になっているが、本書でも、やはり多くの写真を挿入している。そして、ところどころで写真の説明を加えているのは、いかにも凝り性の著者らしい。

なかでも、「聖岳のチョウノウスケソウ」の説明は20行にも及ぶ詳しいものである。花が好きらしく、山の写真よりも花の写真が多くて、楽しい。また、巻末に「妻へのお土産」という写真があるのが、なんとほほえましい。

「あとがき」の最後に「築二五〇年のあばらや楽山斎のあるじ」と記されているが、筆者はこの「築二五〇年のあばらや」を知っている。広い敷地の中に建てられた好ましい古民家で、現代の住居としては、むしろ贅沢なものだ。いかにも、著者の美学にふさわしいものと言えよう。

(水野勉)

『虹芝寮——虹芝寮80年の歩み』

柿沼恭介他・編

虹芝寮

2013年3月
成蹊踏高会
菊判 325頁
定価 5000円

今から80年前、高校生たちが自分たちの山小舎がほしいと願い、その夢を実現させた。山岳名著を読み、セガントーニの描く絵のような山小舎に思いを馳せて構想されたその山小舎は、今も残雪に屹立する谷川岳、聖炭岩峰の麓湯

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先

東京海上日動火災

グループ代理店

株式会社東海日動パートナーズ東東京

団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail: a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp

TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

檜曾川畔に建つ。「その夢の山小舎というのは、岩峰に取り囲まれ、夏は岩に登り、冬はスキーを楽しむ(渡辺兵力氏)」ものであり、若者の夢を成蹊学園の教育が支えて実現したのである。

本書はその虹芝寮(教育理念から寮と呼ばれる)の80年の歴史を、ヒュッテンブーフ(虹芝寮日誌)および学園・踏高会の資料を基に上梓された記念誌である。

第1章「寄稿」には、この虹芝寮を訪れた哲学者・串田孫一、クライマー・小川登喜男など、多彩な岳人たちの思いが寄せられる。若い人たちは虹芝寮でのさまざまな活動や生活から多くを学んだ。その一つが「心の草をとる」と喩えられる寮の掃除哲学である。「次に来る誰かのために、来た時よりも少しだけ美しくして帰る」。この精神は、寮を思う心、人を思う心とともに、山岳部だけではなく生物部・ワンダーフォーゲル部、歩学会など……と長く今に受け継がれている。

第2章は「虹芝寮80年の記録」と名付けられ、昭和の初めの貴重な写真や保存された文書と工夫された構成で、建設の道程がよく理解

できる。高木正孝氏は完成時の高揚した気持ちを、単なる山小舎ではなく「虹芝寮は私達の修養道場です」と書く。

山の歌としてよく知られた寮歌「山の友によせて」(踏高会員・戸田豊鐵氏作詞・作曲)誕生に秘められた物語もある。そして、寮周辺の生き物たちや四季の移り変わりの写真が素晴らしい。

第3章の「歴代記録」は、昭和7年の初代虹芝寮建設計画から改修・改築の推移と経過、平成23年改修までの記録が設計図、費用、使用部材に至るまで、戦争を挟んで残された大切な資料を駆使して描かれる。

虹芝寮という一つの山小舎の歴史を掘り起こし、80年前の若者の夢をたどった関係者に敬意を表したい。本は重厚な造りに仕上がっており、ゆつたりと組まれた本文は読みやすい。良き山の日々を、良き友と憩わん、と感じるに違いない。

(絹川祥夫)

図書受入報告(2013年4月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
手嶋亨	沢登り: 沢登りの技術・知識解説とルートガイド	57本収録	248p/21cm 山と溪谷社	2013	出版社寄贈
梅干野成央	山岳に生きる建築: 日本の近代登山と山小屋の建築史	80p/21cm	信州大山岳科学総合研究所	2013	著者寄贈
宇都宮大学多文化公共圏センター(編)	日光研究プロジェクト2012 報告書	60p/30cm	宇都宮大学多文化公共圏センター	2013	尾田啓一氏寄贈
栃木県歴史文化研究会(編)	日光近代学事始(ずいそうしゃ新書 No.6)	150p/18cm	随想舎	1997	尾田啓一氏寄贈
栃木県歴史文化研究会(編)	続日光近代学事始(ずいそうしゃ新書 No.13)	191p/18cm	随想舎	2004	尾田啓一氏寄贈
川島由夫	山岳・音楽・文学	399p/20cm	朝日出版社	2013	著者寄贈
猪股清郎	「即身」の山	332p/22cm	猪股清郎(私家版)	2013	著者寄贈
柴野邦彦(編・解説)	山谷晴天: 辻まことアンソロジー	190p/19cm	未知谷	2013	出版社寄贈
柴野邦彦(編・解説)	山中暦日: 辻まことアンソロジー	190p/19cm	未知谷	2012	出版社寄贈
航海記出版委員会(編)	南極探検船「開南丸」野村直吉船長航海記	181p/22cm	成山堂書店	2012	南極OB会寄贈
白瀬隊100周年記念プロジェクト(編)	白瀬 大和雪原に立つ: 白瀬日本南極探検隊100周年記念誌	267p/30cm	白瀬隊100周年記念プロジェクト	2013	南極OB会寄贈
ホランド(著)太田昌秀(訳)	北極探検と開発の歴史: ダイジェスト版(CD完全版あり)	213p/19cm	同時代社	2013	南極OB会寄贈
ホランド(著)太田昌秀(訳)	北極探検と開発の歴史: Maps	19cm	同時代社	2013	南極OB会寄贈
平野裕也(編)	「登山を楽しむ科学(V)」フォーラム: 2013年3月23日(土)	17p/30cm	日本山岳会科学委員会	2013	発行者寄贈
ライチョウ会議(編)	第13回ライチョウ会議岐阜大会報告書: 2012年10月13日-15日	162p/30cm	ライチョウ会議	2013	発行者寄贈
多摩森林科学園(編)	桜の新しい系統保全: 形質・遺伝子・病害研究に基づく取組	41p/26cm	森林総合研究所多摩森林科学園	2013	清志田隆氏寄贈

会務報告

平成25年度第1回(4月度)理事会
議事録

日時 平成25年4月10日(水)19時～

21時10分

場所 日本山岳会集会室

【出席者】尾上会長、吉永・西村各
副会長、高原・森・小林各
常務理事、野澤・中山・永
田・萩原・節田・川瀬・古野
各理事、平井・浜崎各監事

【審議事項】

1・太陽A S G 有限責任監査法人
との業務契約継続について(小林)

別添に示すとおり、財務に関する
指導・助言および内部監査の補
助事務を行なうことで契約を継続
する。ただし、契約期間を平成25
年4月1日より平成26年5月31日
とした。(承認)

2・会報「山」、「山岳」編集に係わ
る編集業務委嘱について(小林)

別添に示すとおり、業務委嘱を
する。(承認)

3・山研管理人雇用の継続につい
て(森)

別添に示すとおり雇用の継続す
る。(承認)

4・寄付金等受入れについて(小林)

高尾の森づくりに100万円の
寄付があったほか、5件190万
7000円の助成金受入れ申請が
あった。(承認)

5・会員管理システムの対応(保
守・運用支援等業務委託契約)に
ついて(高原)

別添に示すとおり、未契約だっ
た過去2年分(平成23、24年度)お
よび平成25年度分の標記契約を結
び、精算する。(承認)

6・規程類 職員就業規程ほか)の
改正について(高原)

別添に示すとおり、組織変更
に伴い名称等を変更する。また、職
員就業規程を現状に合わせた改正
をする。(承認)

7・支部長の交代について(高原)

・宮城支部：新支部長 佐藤昭次
郎(11830)、退任 高橋二義
(7885)

・広島支部：新支部長 兼森志郎
(11958)、退任 杉村功(1
2672) (承認)

8・次期(平成25年度～平成26年
度)役員について(尾上)

以下のとおり候補者案が提案され
た。(50音順)

理事 大槻利行(13019) 新任

理事 落合正治(13517) 新任

理事 勝山康雄(8772) 新任

理事 川瀬恵一(14424) 再任

理事 黒川 恵(7547) 新任

理事 佐藤 守(13431) 新任

理事 節田重節(6720) 再任

理事 高原三平(7949) 再任

理事 直江俊式(14775) 新任

理事 野口いづみ(12105) 新任

理事 古野 淳(12194) 再任

理事 森 武昭(9620) 再任

理事 山賀純一(14660) 新任

理事 山田和人(9909) 新任

理事 吉川正幸(7345) 新任

監事 浜崎一成(11248) 再任

監事 吉永英明(7045) 新任

9・入会希望者について(高原)

28名の入会希望者があった。

【報告事項】

1・第7回日中韓三国学生交流登
山の日程変更について(高原)

8月16日～21日(以前は、24日～
29日だった)に実施する。

2・マッキンリー気象観測につい
て(森)

大蔵喜福会員、アラスカ大学よ
り別添に示す実施提案があり、常
務理事会で了承した。今後、大蔵
会員から支払請求があった場合、
内容をチェックした上で、支払い
に応じることとする。今後の当会
の対応窓口は、常務理事会とする。
3・奇石博物館の記事について
(高原、節田)

会報(2013年3月号)掲載の
奇石博物館の記事内容で不適切箇
所があった。今後、掲載記事の内
容については事前に精査する等一
層の配慮が必要との確認をした。
指摘のあった会員に対して、別添
に示す文面を提出する。

4・3月28日、内閣府への平成25
年度事業計画、収支予算書提出の
手続きが完了した。(高原)

5・報告事項2に関する、電源開
発(Jパワー)の寄付金125万円
を受領した。(小林)

6・平成25年度子どもゆめ基金助成金(内定)について(永田)

ウェブ教材「親子で楽しむ山登り」が内定した(交付限度額886万1000円)。実行に当たってリスク、課題もあり、ワーキング・グループによる管理組織を設置して臨みたい。

7・寄付金等受入れについて(小林)

四国支部、北海道支部、本部、高尾の森づくりの会から、寄付金を受入れた旨の報告があった。

合計592万4000円。山梨、信濃、北海道、東海各支部から助成金を受入れた旨の報告があった。合計190万7000円。なお、今年度の寄付金・助成金の受入れ額は、約2200万円になる。

8・第7回日本山岳会森づくり連絡協議会の開催について(吉永)

3月30日(土)高槻森林観光センター(高槻市)に8支部41名が参加して行なわれた。各支部の活動報告、研究発表があり、ペレット工場を見学した。

9・旅行業法に基づく「募集の手引き」について(高原)

「募集の手引き」が完成したので、会の関係各団体などに通知し、HPで広報したい。

10・国有林野(上高地山研)の使用許可書を受領した。(高原)

11・ロゴマーク使用許可申請(山梨支部)があり、了承した(高原)

12・Trans Japan Alps Race 2014の名義後援について要請があり、了承した。ただし、自然環境保全や登山者マナーの遵守にはより一層留意してもらいたい旨を申し入れる。(高原)

13・「山の日」制定関連の動きについて(西村・萩原)

「山の日」制定協議会は発展的に再構築する。新組織のために「世話人会」をつくり「連合事務局」を置く。4月10日に超党派「山の日」議員連盟がスタートした。山の日を制定し祝日とすることを目的とし、会長に衛藤征士郎衆議院議員、幹事長に丸川珠代参議院議員などが就任した。

また、高尾山で「山の日」集会を行なうなど、「山の日」制定に向けた動きが活発化している。

14・平成25年度(第15回)「秩父宮記念山岳賞」推薦募集をホームページ、会報で広報する。(西村)

15・『山岳』第百八年(2013年)について(節田)

新しく各委員会の活動報告を掲

載するほか、海外登山の記録や調査・研究などを掲載する。

16・国土地理院「電子国土賞2013」の推薦募集がホームページで公開された。推薦募集期間は8月1日から9月20日。(高原)

17・群馬県から谷川岳危険地区での登山禁止(3月22日～4月30日)の連絡があった。(高原)

18・㈱フライングネットより『男の隠れ家』別冊『日本山岳史』(仮)への写真資料貸出について依頼があり、了承した。(高原)

19・キャシヤール峰南ピラー初登山に成功したキャシヤール登山隊2012(花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉)が、ピオレドールを受賞した。(萩原)

20・会報「山」4月号について(節田)
「放射線と登山道」(浦添嘉徳)、「絵本「アルバータ山のピッケル」ものがたり」出版にあたって(芳賀淳子)などを掲載。

【今後の予定】

1・小島島水祭(4月13日～14日) 四国支部

2・高尾山「山の日」の集い(6月2日)、「山の日」制定協議会

3・第29回全国支部懇談会(10月20日(日)～21日(月))静岡支部

4・監事監査(5月13日)、常務理事会(5月13日)、理事会(5月15日)

5・支部長会議・総会・臨時理事会(6月15日)

6・富士山測候所を活用する会総会(5月26日)

7・国立登山研修所の事業計画(別紙)

8・『世界の山岳大百科』(山と溪谷社)を会員に割引販売の予定

1日 総務委員会

2日 総務委員会 図書委員会
スケッチクラブ

3日 集会委員会 YOUTH CLUB

4日 常務理事会

5日 スケッチクラブ 「山の日」制定PT

8日 高尾の森づくりの会 スキークラブ

9日 スケッチクラブ 山岳研究所運営委員会

10日 理事会 休山会 山想倶楽部

11日 フォトビデオクラブ 山の自然学研究会 山岳地理クラブ

12日 九五会
15日 総務委員会 資料映像委員会 自然保護委員会

ル
ー
ム
日
誌
4月

高尾山で「山の日」呼びかけ

日本山岳会などの「山の日」制定協議会は、6月2日に高尾山にて、一般登山者に向けて「東京にも『山の日』をつくろう」と呼びかける小集会を開き、ピラを配布する。高尾山は週末になると約8000人を超える登山者がやって来ることが予想されているため、インパクトのある呼びかけとなるだろう。

昨年10月に開催された「山の日」ネットワーク東京会議では、6月第1日曜日を「山の日」と制定する運動を盛り上げようとの申し合わせがあり、また全国各地で同様の動きがあることも受けて、今回の呼びかけが計画された。主管は東京多摩支部であり、呼びかけの準備や運営面を担当している。

都内の会員の皆さんはもちろん、近県の方々もぜひご参加ください。

- ・日時 6月2日(日)
- ・集合 9時 高尾登山電鉄ケーブルカー清滝駅前(山麓の駅)
- ・内容 清滝駅前広場で9時半以降午前中に3回の呼びかけ小集会を開き、ピラ配布。
- ・申込 東京多摩支部
(坂本正智 FAX 042 (373) 3288
✉ big-matti@kqh.biglobe.ne.jp)

16日	山の自然学研究会	00回
17日	スキークラブ	
18日	つくも会 三水会 青年部	
19日	01回 科学委員会	みちの
20日	り山の会	
21日	支部活性化PT	YOUT
22日	H CLUB	
23日	緑爽会 YOUTH CLUB	
24日	デジタルメディア委員会	
25日	高尾の森づくりの会	
26日	自然保護委員会 麗山会海	
27日	外委員会	
28日	学生部 山遊会	
29日	フォトビデオクラブ	公益
30日	法人運営委員会	
31日	4月来室者	483名

会員異動(4月分)

羽田栄治	(5 5 4 8)	13	・	4	・	5
松山 斉	(1 0 7 3 1)	13	・	4	・	1
黒田 滋	(1 2 4 0 3)	13	・	1	・	3
川越典子	(1 3 0 3 2)	13	・	4	・	2
退会		20	20	17	5	
清和良晴	(6 7 5 3)	福島				
磯田 寛	(1 2 1 8 9)	東海				
小野隆央	(1 2 5 8 2)	北海道				
下斗米紘二	(1 3 1 7 9)	埼玉				
菊澤雄吉	(1 3 2 0 4)					
寺西伸子	(1 3 3 1 1)	東海				
大川 昭	(1 3 3 2 0)					
吉本昭教	(1 3 8 0 9)	宮崎				
上保三郎	(1 3 9 6 1)					
坂部公治	(1 4 3 3 6)	東海				
久守弘子	(1 4 5 3 1)	北海道				
市村佑子	(1 4 5 7 6)	広島				
棕本逸雄	(1 4 6 9 0)	北九州				

◆「中央アルプス木曾駒ヶ岳・空木岳縦走」

木曾駒にはロープウェイで上がります。

日程 7月26日(金)～28日(日)

集合 26日11時 JR駒ヶ根駅

解散 28日17時ごろ 駒ヶ根駅

宿泊 宝剣山荘、木曾殿山荘

費用 2万3千円(宿、保険料他)

定員 15名

申込 7月10日までに、征矢三樹

03 (3770) 4228

✉ Soyamiki@td5.so-net.ne.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆白神山・ブナ林再生事業

参加費無料。ただし寝袋、食料

必携。テントはこちらで用意可。

日程 6月29日(土)～30日(日)

集合 29日8時 JR弘前駅城東口、

10時半奥赤石林道ゲート

解散 30日15時 林道ゲート

定員 30名

インフォメーション



申込 6月16日までに、須々田秀美
〒036-0103 平川市本町北柳田96-2
FAX 0172 (44) 7237
✉ h.susuta@gmail.com

◆「国立極地研究所見学会」のご案内

展示ホールを見学後、元極地研究所所長の渡邊興亜会員に南極観測について講演していただきます。

日時 7月20日(土)14時～16時30分

定員 30名

場所 国立極地研究所

TEL 042 (512) 0910

申込 6月末日までに、岡義雄

TEL 090 (2140) 5057

✉ okayoshio@ozio.jp

*終了後に懇親会を予定しています。

◆「上高地フラワートレッキング」

山の自然学研究会

往復15～17キロを歩きます。参加

条件は、最近20キロ以上歩いた人。

日時 6月13日(木)集合9時/解

散・15時予定

日本山岳会蔵資料紹介 No.2

[資産番号] 00111

[資料名] 大木操旧蔵の山岳写真・ガラス乾板165枚

[部門名] 写真

[寄贈者] 大木 操

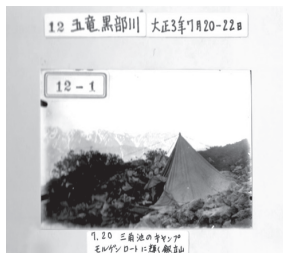
[受入日] 1969年6月19日(アルバムは1979年3月19日)



① 10-10 (大木操)
「8.17 帰京後の登山姿」
手に着英蓆を巻いた金剛杖
肩に手札型カメラと雑囊
腹に黒兵古帯を巻いている
カビネ写真草箱と登山用竹行李



② 8-1 「8.7 河童橋のウェストン夫妻」
上条嘉門次、根本清蔵



③ 12-1 「7.20 三角池のキャンプ」
モルゲンロートに輝く剣、立山



④ 7-7 「8.6 前穂高岳頂上にて」



大木操が1912～1914 (大正1～3) 年に撮影した旧蔵の山岳写真。ガラス乾板165枚 (手札判146枚、キャビネ判19枚)、目録、原版焼き付け写真アルバムである。「組み立て暗箱カメラ」で撮影したもので、ガラス乾板のそれぞれに、写真原版が添えられている。原版目録は、1～16 (山域、日時) の項目からなり、1-1……16-12まである。アルバムは、大木が晩年に整理したものと思われる。各写真に詳細な説明が添えられている。どれをとっても、黎明期の登山を知る上で貴重なものばかりである。

写真①、大木である。写真②、大木の写真で最も有名な「河童橋のウェストン夫妻」。写真③、「7.20 三角池のキャンプ」。写真④、「8.6 前穂高岳頂上にて」、氏名が記されている。写真②は、前穂高岳より下山後の翌7日、上高地で撮影したもの。

なお、日本山岳会ホームページ→委員会活動→資料映像委員会→所蔵資料紹介へとアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、下記までお寄せください。

✉ jacshiryo102@jac.or.jp

日本山岳会会報 山 816号

2013年(平成25年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
●編集部に嬉しい便りが続いた。先月号で紹介した絵本『アルパタ山のピッケル物語』について、購読希望の連絡が相次いだという報告や、連載「日本山岳会所蔵資料紹介」をきっかけに、旧知の間で会話が弾んだことなどだ。会員の広場、輪としての会報の役割を、なかなか形にできずに試行錯誤中であるため、ひとときわ勇気づけられる声に感謝しました。

(柏澄子)

場所 集合・解散ともに、上高地
ビクターセンター前広場
費用 600円(資料代、保険料)
申込 5月27日までに、大船武彦
✉ shbtaw@yahoo.co.jp
*小雨決行。一般参加もあります。
*申込み者に詳細案内を送ります。